



Title	Taittirīya-Samhitā第7章とサーマヴェーダ所属ブラーフマナ
Author(s)	大島, 智靖
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2003, 37, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Taittiriya-Samhitā 第7章と サーマヴェーダ所属ブラーフマナ

大島 智 靖

1 はじめに

ヴェーダのブラーフマナ文献群に伝えられるソーマ祭について、その基本型は Jyotiṣṭoma と呼ばれる。サーマヴェーダ所属ジャイミニーヤ派のブラーフマナである Jaiminiya-Brahmaṇa (JB) とカウトゥマ派の Pañcaviṃśa-Brahmaṇa (PB) の Jyotiṣṭoma 章の冒頭では、Jyotiṣṭoma に関する神話的及び全般的解説が述べられている。これらの箇所に関しては黒ヤジュルヴェーダ所属タイッティリーヤ派の Taittiriya-Samhitā (TS) 第7章のブラーフマナ部分に密接な並行箇所が存在する。TS 第7章は更に Jyotiṣṭoma 冒頭部分に続いて、より長期間のソーマ祭である Ahina や Sattra¹⁾ を解説し、この部分も JB と PB に対応箇所を持っている。²⁾ これらの3つのブラーフマナの対応箇所はいかなる関係を持っているのだろうか。この3つのブラーフマナが当該箇所において各々何を共有しているのかを整理し、考察を試みるのが本稿の目的である。

2 テキストの対応

JB と PB はサーマヴェーダ祭官の職務 (= 歌詠) に主に焦点をあてて記述したものであり、各 stotra (サーマヴェーダ祭官達による詠唱)³⁾ の形態やその祭式効果等を解説する。本稿で扱う Jyotiṣṭoma の冒頭部分とは、

Jyotiṣṭoma に関する神話的根拠付けや祭式効果を述べた箇所、即ち JB 1.66-69, PB 6.1.1-6.3.16 及びそれらと並行する TS 7.1.1.1-7.1.3.3 である。PB と JB は共通のテーマを多く持っているが、⁴⁾ その相互関係については未だ問題を残す。⁵⁾ これらの並行部分には、TS のヤジュルヴェーダ祭官の視点と JB と PB のサーマヴェーダ祭官の視点の対比がどれ程見出されるのだろうか。TS, JB, PB の該当部分の対応を以下に示した。

表 1 Jyotiṣṭoma (-は対応部分の無いことを示す)

No.	TOPICS	TS	JB	PB
1	繁殖及び Agni は光	7.1.1.1	1.66:1 ⁶⁾	-
2	Virāj は光	7.1.1.1	1.66:1-2	6.3.5-6
3	stoma ⁷⁾ の savana 運び	7.1.1.1	1.66:2-4	cf. 16.1.6
4	asthūri, 願望の成就	7.1.1.1-2	1.67:1-2	cf. 16.1.6;6.3.2
5	Prajāpati 神話 (囲い込)	7.1.1.2-3	1.67:3-16	6.1.1-5
6	Prajāpati 神話 (創出)	7.1.1.4-6	1.68-69	6.1.6-13
7	stoma に光を置く	7.1.2.1	1.66:5-12	-
8	Sarvastoma	7.1.3.1-3	-	-
9	全 stoma 論	-	-	6.2.1-9
10	Agniṣṭoma 諸議論	-	-	6.3.1;3-4;7-16

第一に、JB の冒頭 (No. 1-2) が TS と一致しているのに対して、PB の該当箇所は 6.3.5-6 に部分的に見出されるという構成上の問題がある (本稿 3.1)。第二に、それに続く締め括りとなる部分 (No. 3-4) においても、やはり JB は TS と一致しているのに対して、PB では第 6 章ではなく第 16 章に対応部分がある (本稿 3.2)。第三に、「stoma に光 (jyotis) を置き続ける」という TS と JB に共通する No. 7 のテーマが PB に見られない (本稿 5)。これらを以下に詳論していく。テキスト中の [数字] は表 1 の No. である。

3 No. 1-4 (Agniṣṭoma の意義付け)

3.1 No. 1-2 について

TS, JB, PB の順に挙げて対照してみる。

TS 7.1.1.1: [1] prajānanam jyōtir. agnīr devātānām jyōtir. [2] virāt chāndasām jyōtir. virāḍ vācō 'gnāu sām tiṣṭhate. virājam abhī sām padyate. tasmāt tāj jyōtir ucyate. 「[1] 光は繁殖である。アグニは神々の光である。[2] Virāj は諸韻律の光である。Virāj (即ち Agniṣṭoma⁸⁾) はことばに属するアグニに完結する。⁹⁾ Virāj へと重なり合う。¹⁰⁾ それゆえ、そ (の祭式) は光 (即ち Jyotiṣṭoma) と言われる。」

JB 1.66: 1-2: [1] prajānanam¹¹⁾ jyotir. agnīr devātānām jyotir. [2] virāt chāndasām jyotir. virāḍ vācy agnau samtiṣṭhate. virājam sampadyate. tasmād eṣa jyotir ucyate. 「[1] 光は繁殖である。アグニは神々の光である。[2] Virāj は諸韻律の光である。Virāj (即ち Agniṣṭoma) はことばであるアグニに完結する。Virāj へと重なり合う。それゆえ、こ [の祭式] は光 (即ち Jyotiṣṭoma) と言われる。」

PB 6.3.5: agnau stotram agnau śaṣṭram pratitiṣṭhati. tena brahmavarcasyaḥ. // 「アグニに詠唱が、アグニに讃誦が安立する。¹²⁾ そのことにより、(Agniṣṭoma は) 婆羅門の輝きをもたらすものである。」

PB 6.3.6: [2] kiṃ jyotiṣṭomasya jyotiṣṭomatvam ity āhur. virājam saṃstutaḥ sampadyate. virāḍ vai chāndasām jyotiḥ. // 「[2] 『Jyotiṣṭoma の Jyotiṣṭoma たる所以はどのようなものか?』と彼らは言う。(Agniṣṭoma は) 完全に詠われると Virāj へと重なり合う。Virāj は諸韻律の光 (jyotis) なのだ。」

上記の3つのテキストに共通している主題は、当の祭式を Jyotiṣṭoma と呼ぶことの根拠付けである。この祭式と光 (jyotis) を結びつけるための

媒介項として、3 テキストとも Virāj を用いている (TS 及び JB は「繁殖」と「アグニ」も挙げる)。TS と JB は Jyotiṣṭoma 章の冒頭としてこの議論を始めているが、PB だけがこのような構成を採らない。PB 6.3.5 は詠唱と讃誦が「アグニに安立する」と述べるが、これは TS 及び JB の「アグニに完結する」と対応していると考えられる。しかし PB は TS 及び JB と異なり、「婆羅門の輝きをもたらすもの」という結論を導いている。

3.2 No. 3-4 について

ここでは、2 頭の馬が車を運ぶことに例えて、2 つずつの stoma が朝、正午、3 回目の各ソーマ搾りを運ぶということについて述べる。TS と JB 間では、用いられる単語にいくつかの相違点が見られるが、内容は一致する。PB では、第 6 章に対応箇所がない。しかし、16.1.6 の Ekāha 祭 (Jyotiṣṭoma を含む一日祭の総称) の記述に類似表現が見出される。

TS 7.1.1.1-2: [3] dvāu stōmau prātaḥsavanām vahato, yāthā prāṇās cāpānās ca. dvāu mādhyam̐dinaṁ sāvanam, yāthā cākṣuś ca śrōtram ca. dvāu tṛtiyasavanām, yāthā vāk ca pratiṣṭhā ca. [4] pūruṣasammito vā eṣā yajño 'sthūriḥ.// yam̐ kāmam̐ kāmāyate tām etēnābhy āśnute. sārvaṁ hy āsthūriṇābhyāśnutè... 「[3] 2 つの stoma が朝のソーマ搾りを運ぶ、呼気と吸気と [が運ぶか] のように。2 つ [の stoma] が正午のソーマ搾りを運ぶ。視覚機能と聴覚機能と [が運ぶか] のように。2 つ [の stoma] が 3 回目のソーマ搾りを運ぶ。言語機能と脚部と [が運ぶか] のように。[4] この祭式は人間と同じ大きさを持ち、両頭立て¹³⁾である。人が望むところの願望、その願望へと、これ (Agniṣṭoma) によって到達する。人は両頭立ての [乗り物] によって一切へ(何にでも)到達するから。」

JB 1.66: 2-4: [3] dvau stomau prātassavanam vahato, yathā cakṣuś ca prānas ca tathā tad. dvau stomau mādhyamdinam savanam vahato, yathā ca śrotram ca bāhū ca tathā tad. dvau stomau ṛtīyasavanam vahato, yathā madhyam ca pratiṣṭhā ca tathā tad. 「[3] 2つのstomaが朝のソーマ搾りを運ぶ、視覚機能と呼気と [が運ぶか] のように、そのようにそれを。2つのstomaが正午のソーマ搾りを運ぶ、聴覚機能と両腕と [が運ぶか] のように、そのようにそれを。2つのstomaが3回目のソーマ搾りを運ぶ、腰と脚部と [が運ぶか] のように、そのようにそれを。」

JB 1.67: 1-2: [4] asthūrīr vā eṣa yajñāḥ puruṣasammito. yatkāma enam āharate sam asmai kāma ṛdhyate. 'sthūrīnā hi tatra gacchati yatra jigamiṣati. 「[4] この祭式は両頭立てであり、人間と同じ大きさを持つのだ。人が何を望んでそれ (Agniṣṭoma) を執行すると、(何であれ) この者のための願望は成就する。彼は両頭立ての [乗り物] によって行きたいところへ行くから。」

PB 16.1.6: [4] asthūrīr vā eṣa santato yajño. [3] dvau-dvau hi stomau savanam vahatas. trivṛt-pañcadaśau prātassavanam, pañcadaśa-saptadaśau mādhyandinaṃ savanam, saptadaśaikaviṃśau ṛtīya-savanam. // 「[4] この完全に織り広げられた祭式 [というもの] は、両頭立てなのだ。[3] 2つずつのstomaがソーマ搾りを運ぶから。trivṛt[stoma] と pañcadaśa [stoma] が朝のソーマ搾りを、pañcadaśa [stoma] と saptadaśa[stoma] が正午のソーマ搾りを、saptadaśa[stoma] と ekaviṃśa [stoma] が3回目のソーマ搾りを。」

PB 6.3.2: ekasmā anyo yajñāḥ kāmāyāhriyate. sarvebhyo 'gniṣṭomaḥ. // 「他の祭式は、一つの願望のために執行される。Agniṣṭomaは一切 [の願望たち] のために。」

ここで列挙された項目を考えてみると、問題となるのは TS と JB が「2つの stoma」とだけ述べるのに対して PB が *trivṛt*, *pañcadaśa*, *saptadaśa*, *ekaviṃśa* の4つの stoma を具体的に列挙している点である。PB の記述は、実際の *Agniṣṭoma* の stoma 適用順に則っている。¹⁴⁾ TS と JB は各々6つの生態諸機能を比喻として挙げているが、最後の *pratiṣṭhā* (脚部) は PB の挙げる *ekaviṃśa* [stoma] と対応する。¹⁵⁾ また、TS と JB は共に「願望の成就」の記述で締め括っているが、PB は 6.3.2 でそれに簡潔に言及している。

4 No. 5-6 (ブラジャーパティの神話)

No. 5-6 は、ブラジャーパティによる創造神話である。No. 5 は「生類 (*prajā*) の囲い込み (*parigrhnāti*)」、No. 6 は「4段階の創出」である。内容を要約しながら、以下に概観してみたい。

4.1 No. 5 について

No. 5 の前半は、*Agniṣṭoma* を構成する詠唱 (と讃誦) の数「12」と生類が胎児を保持する期間「12 (ヶ月)」を絡めた議論である。ブラジャーパティが *Agniṣṭoma* によって生類を創出し、さらに12番目の詠唱と12番目の月によってそれらの生類たちを囲い込んだが故に胎児は12ヶ月で誕生するという (JB 1.67: 3-7; PB 6.1.1-3)。これは *Agniṣṭoma* が子孫繁栄を齎す祭式であることを意味している。ただし、TS は「*Agniṣṭoma* によって囲い込んだ」と述べるのみで、12にまつわる議論をしない (TS 7.1.1.2)。後半はブラジャーパティが囲い込んだ家畜たちの話である (TS 7.1.1.2-3; JB 1.67: 8-13; PB 6.1.4-5)。牝ラバ (*aśvatara*, PB のみ *aśvatari* 「牝ラバ」) が囲い込みから跳び越えて逃げると、ブラジャーパティはそれを追い

かけ、精液を奪う。そしてそれを他者に塗る。塗られる対象となるのは、TS: 牡ロバ (gardabhā)、牝馬 (vāḍabā)、植物たち、子孫たち
 JB: 牡ロバ (gardabha)、牝馬 (baḷabā)、家畜たち、植物たち
 PB: 牝馬 (vaḍavā) である。そして牡ロバと牝馬は「2 (種) の精液を持つ」(dviretās) と呼ばれ、¹⁶⁾ 精液を奪われたラバは「繁殖能力が無い」と見なされる。それゆえ、プラジャーパティの囲い込みを跳び越えたラバは Agniṣṭoma の報酬としてふさわしくないと結論される。¹⁷⁾ TS はこの牡ラバを、全財産或いは千頭の牛を報酬とする祭式 (Sarvavedasa 或いは Sahasra¹⁸⁾) において報酬とすべきであると説く。一方、JB と PB はラバを余分なものに見なし、やはり余分なものに見なされる ṣoḍaśin stotra¹⁹⁾ における報酬とすべきだと説く。以上のように前半では、TS は JB と PB が前半で行っている stotra (詠唱) にまつわる議論をしない。また後半では、TS は「牡ラバは Agniṣṭoma の報酬としてふさわしくない」という結論まで JB とほぼ並行するが、牡ロバの始末は JB 及び PB が挙げる Ṣoḍaśin ではなく別の祭式を挙げ、やはり stotra に関わらない。

4.2 No. 6 について

No. 6 の「プラジャーパティからの4段階の創出」は、RV 10.90 のプルシャ賛歌を基にしたと考えられる神話である。RV 10.90 では、神々が「人」を供物として（このとき春がバター、夏が薪、秋が供物となり）自分たちのために祭式を行うと、詩節、サーマン、韻律、祭詞が生じ、さらに馬たち、馬の仲間たち、牛たち、山羊・羊たちが生じた。そして神々が「人」を分割すると、口から婆羅門が、両腕から王族が、両腿から庶民が、両足から奴隷が生じ、さらに思考から月、視覚機能から太陽、口からインドラとアグニ、息から風、臍から中空、頭から天、両足から大地、聴覚機能から諸方角が生じた。RV はプルシャの分割によって諸世界の形成を説こうと

したと言える。3つのブラーフmanaでは、ブラジャーパティが繁殖を望み、口(頭)部、胸(両腕)部、腰部、脚部から stoma, 韻律、サーマン、神格、四階級、季節、家畜を各々4(乃至3)種類創出する。以下に3ブラーフmanaにおいて創出されたものを纏めて、考察をしたい。

表2 ブラジャーパティから創出されたもの(同一は= 無いものは \emptyset)

創出 sr̥ṣṭa	部位	TS	JB	PB
stoma	頭部	trivṛt	=	=
	胸部	pañcadaśa	=	=
	腰部	saptadaśa	=	=
	脚部	ekaviṃśa	=	=
韻律 chandas	頭部	gāyatrī	=	=
	胸部	trīṣṭubh	=	=
	腰部	jagatī	=	=
	脚部	anuṣṭubh	=	=
サーマン	頭部	rathantara	=	\emptyset
	胸部	bṛhat	=	\emptyset
	腰部	vairūpa	vāmadevya	\emptyset
	脚部	vairāja	yajñāyajñīya	\emptyset
神格 devatā	頭部	アグニ	=	=
	胸部	インドラ	=	≠
	腰部	一切神	=	=
	脚部	\emptyset	\emptyset	\emptyset
人間 manuṣya	頭部	婆羅門 brāhmaṇa	=	=
	胸部	王族 rājanya	=	=
	腰部	庶民 vaiśya	=	=
	脚部	奴隸 śūdra	=	=
季節 ṛtu	頭部	\emptyset	\emptyset	春 vasanta
	胸部	\emptyset	\emptyset	夏 grīṣma
	腰部	\emptyset	\emptyset	雨期 varṣā
	脚部	\emptyset	\emptyset	\emptyset
家畜 paśu	頭部	山羊 aja	山羊 aja	\emptyset
	胸部	羊 avi	馬 aśva	\emptyset
	腰部	牛 go	牛 go	\emptyset
	脚部	馬 aśva	羊 avi	\emptyset

婆羅門、王族、庶民、奴隸の四階級の創出は RV と同一である。さらに韻律、サーマン、神格(アグニとインドラ)、季節(春・夏・秋)、家畜(馬、牛、山羊・羊)も RV に出てくるが、3つのブラーフmanaではこれらも四

階級に合わせて4(乃至3)種類に分け、対応させている。TSとJBに対して、PBだけがサーマンを挙げずに季節を挙げている点が最も大きな相違点である。また、TSとJBの項目はほぼ一致するが、4種類のサーマンのうち後半2つが全く違っている。しかしどちらも定型のサーマンの組み合わせとしてよく用いられるものである。TSの挙げる rathantara, bṛhat, vairūpa, vairāja は、頻出する組み合わせである。²⁰⁾ またこれらのサーマンは、Gavāmayana 中の Pr̥ṣṭha-śadaha という6日間に用いられる6つのサーマンのうち4つでもあるから、6つのサーマンの列挙の中にも現れる。²¹⁾ 一方JBの挙げる rathantara, bṛhat, vāmadevyā, yajñāyajñīyā の組み合わせは比較的少ない。²²⁾ ヤジュルヴェーダ所属の主なブラーフマナ中では bṛhat, rathantara, vāmadevyā の3つの列挙は多いが、yajñāyajñīyā (-niya) に対する言及そのものは少ない。TSが rathantara, bṛhat, vairūpa, vairāja の組み合わせを選択したのはそのような背景があると考えられる。yajñāyajñīyā というサーマンは Agniṣṭoma の最後(12番目)で用いるサーマンであるから、JBは Agniṣṭoma の完結を意識していると思われる。

5 No. 7 (stoma 論)

本稿2の表1からも分かる通り、No. 7の「stomaに光を置く」という解説はJBの1.66: 5-12にあり、順序としてはNo. 3と4の間に入る。よって、構成の上ではTSと一致していない。²³⁾ この箇所はstomaに関して述べている部分である。trivṛt [stoma] には「婆羅門の輝き」、pañcadaśa [stoma] には「体力と活力」、sapatadaśa [stoma] には「子孫、家畜、繁殖」、ekaviṃśa [stoma] には「脚部」が比喩として用いられている。

TS 7.1.2.1: [7] prātaḥsavané vāi gāyatrēṇa chāndaśā trivṛṭte stōmāya

jyōtir dādhad eti. trivṛtā brahmavarcasēna pañcadaśāya jyōtir dādhad
 eti. pañcadaśēnāujasā vīryeṇa saptadaśāya jyōtir dādhad eti.
 saptadaśēna prājāpatyēna prajānanenaikaviṃśāya jyōtir dādhad eti.
 stōma evā tāt stōmāya jyōtir dādhad ety. ātho stōma evā stōmam abhi
 prā ṇayati. yāvanto vāi stōmās tāvantaḥ kāmās tāvanto lokās tāvanti
 jyōtīṃsy. etāvata evā stōmān etāvataḥ kāmān etāvato lokān etāvanti
 jyōtīṃsy āva runddhe.// [[7] 朝のソーマ搾りでは、かれは gāyatra (サ
 ーマン)によって、trivṛt stoma に光を置き続ける。婆羅門の輝きである
 trivṛt [stoma] によって、pañcadaśa [stoma] に光を置き続ける。体力で
 あり活力である pañcadaśa [stoma] によって、saptadaśa [stoma] に光
 を置き続ける。Prajāpati に属し、繁殖である saptadaśa [stoma] によっ
 て、ekaviṃśa [stoma] に光を置き続ける。他ならぬ stoma が、そのとき、
 stoma に光を置き続けることになる。一方次に、他ならぬ stoma が stoma
 を導くことになる。stoma たちが存在する数だけ、その数だけ願望たちが
 存在し、その数だけ諸世界が存在し、その数だけ光たちが存在する。かれ
 は、まさにそれだけの stoma たちを、それだけの願望たちを、それだけの
 諸世界を、それだけの光たちを獲得することになる。』

JB 1.66: 5-12: [7] himkāreṇa vai jyotiṣā devās trivṛte brahma-
 varcasāya jyotir adadhuh. trivṛtā brahmavarcasena pañcadaśāyaujase
 vīryāya jyotir adadhuḥ. pañcadaśēnaujasā vīryeṇa saptadaśāya
 prajāyai paśubhyaḥ prajānanāya jyotir adadhuh. saptadaśēna prajāyā
 paśubhiḥ prajānanenaikaviṃśāya pratiṣṭhāyai jyotir adadhuh. stoma
 vā etat stome jyotir dadhad eti.²⁴⁾ tasmāj jyotiṣṭoma ity ākhyāyate.
 'tha yat stomas²⁵⁾ stomam savanam abhipraṇayati. tasmāj jyotiṣṭoma
 ity ākhyāyate. 'tho yad yajñas samstuto virājam abhisampadyate.

jyotir virāṭ. tasmāj jyotiṣṭoma ity evākhyāyate.²⁶⁾// 「[7] 光であるヒンの発声によって、神々は婆羅門の輝きである trivṛt [stoma] に光を置いたのだ。婆羅門の輝きである trivṛt [stoma] によって、体力と活力である pañcadaśa [stoma] に光を置いた。体力と活力である pañcadaśa [stoma] によって、子孫と家畜と繁殖である saptadaśa [stoma] に光を置いた。子孫と家畜と繁殖である saptadaśa [stoma] によって、脚部である ekaviṃśa [stoma] に光を置いた。このとき、stoma が stoma に光を置き続けていることになるのだ。それゆえ “Jyotiṣṭoma” と言われる。次に、stoma が stoma をソーマ搾りへと導く。それゆえ “Jyotiṣṭoma” と言われる。一方次に、祭式は完全に詠われると Virāj へと重なり合う。²⁷⁾ Virāj は光である。それゆえ、まさに “Jyotiṣṭoma” と言われる。」

trivṛt stoma に光を置くのは TS では gāyatra (サーマン) だが、これは Agniṣṭoma の最初の Bahiṣpavamāna-stotra で用いられるサーマンである。一方 JB ではヒンの発声 (ヒンカーラ) を挙げるが、これは bahiṣpavamāna-stotra に先立って行われる。²⁸⁾ TS と JB の両テキストは共に 「stoma が stoma に光 (jyotis) を置き続ける」ことを論じて、stoma の連続を説いている。TS は、その結果として stoma, 願望、諸世界、光を獲得すると結論するが、それに対して JB は、既に冒頭 (1.66: 1-2) で論じた 「“Jyotiṣṭoma” と言われることの根拠付け」を再び述べており、両者の結論は異なっている。このどちらの議論も PB には無い。

6 おわりに (まとめ)

冒頭の構成は TS と JB で一致する (本稿 3.1)。続いて TS と JB は同じ内容が続くが、PB は Ekāha の箇所に対応があり、やはり簡潔で具体的である (3.2)。さらに TS と JB のみが共有するテーマがある (5)。プラ

ジャーパティの神話の部分では、やはり TS と JB が内容的に近い。これらのことから、TS が JB と密接な関係を持ち、PB とはやや離れていることが明確である。しかし JB と PB にとって重要と思われる stotra に関する議論が TS には無く、ここにはサーマヴェーダ所属のブラーフmanaとの視点の違いが見てとれる (4.1)。また、3 者の成立順を決定するには他の並行部分のさらなる検討が必要であろう。

註

- 1) Jyotiṣṭoma は 4 日間の準備祭と 1 日の本祭 (ソーマ搾り) から成るが、Ahina は本祭の期間が 2 日~12 日のソーマ祭の総称であり、Sattra は 12 日~1 年以上のソーマ祭の総称である。
- 2) TS 第 7 章と MS/KS 及び JB/PB との対応を以下に示す。(表 3-1、表 3-2)
TS 第 7 章は、ソーマ祭と Aśvamedha マントラ集 (及びブラーフmana) を交互に記述するという構成である。ソーマ祭の記述に関しては JB/PB にかなり対応部分があるが、MS には無く、KS に一部あるのみである。しかし Aśvamedha マントラ集の箇所は MS/KS との関わりが大きい。
- 3) リグヴェーダ祭官による讃誦 (śastra) と対になり Jyotiṣṭoma の基本構造を構成する。それについては、Parpola [10], Vol. 2, p. 13f. を参照。

表 3-1 TS 第 7 章と JB/PB の対応 (M.=mantra 集 ∅=対応無し)

	TS	JB	PB
Jyotiṣṭoma	7.1.1-3	1.66-69	6.1-3
2-5rātra	7.1.4-10	2.235-291	20.11-21.10
Aśvamedha M.	7.1.11-20	∅	∅
6-12rātra	7.2.1-10	2.297-299 etc.	25.10.5 etc.
Aśvamedha M.	7.2.11-20	∅	∅
13-21rātra	7.3.1-10	2.342 etc.	23.1-16
Aśvamedha M.	7.3.11-20	∅	∅
Sattra	7.4.1-11	2.355-358; 365-367	23.21-28; 24.1-17
Aśvamedha M.	7.4.12-22	∅	∅
Gavāmayana	7.5.1-10	4.1;9.4 etc.	2.374 etc.
Aśvamedha M.	7.5.11-14	∅	∅
Aśvamedha	7.5.15	∅	∅
Aśvamedha M.	7.5.16-20	∅	∅
Aśvamedha	7.5.21;22	∅	∅
Aśvamedha M.	7.5.23-24	∅	∅
Aśvamedha	7.5.25	∅	∅

表3-2 TS 第7章とMS/KSの対応 (M.=mantra 集 ∅=対応無し)

	TS	MS	KS
Jyotiṣṭoma	7.1.1-3	∅	∅
2-5rātra	7.1.4-10	∅	∅
Aśvamedha M.	7.1.2-11	3.12.2-8	∅
6-12rātra	7.2.1-10	∅	∅
Aśvamedha M.	7.2.11-20	3.12.15 一部	2.1-10
13-21rātra	7.3.1-10	∅	23.4.6 一部
Aśvamedha M.	7.3.11-20	3.12.7 一部	3.1-10
Sattra	7.4.1-11	∅	33.3 一部
Aśvamedha M.	7.4.12-22	3.12.9;14;18-20	4.1-11
Gavāmayana	7.5.1-10	∅	33.1; 2; 5; 34.4; 5; 7
Aśvamedha M.	7.5.11-14	3.15.10 一部	5.2; 3; 9; 10
Aśvamedha	7.5.15	∅	∅
Aśvamedha M.	7.5.16-20	3.12.6; 16; 17	5.13-15; 17
Aśvamedha	7.5.21;22	3.15.11	5.16; 19
Aśvamedha M.	7.5.23-24	∅	1.1; 5.20
Aśvamedha	7.5.25	∅	∅

- 4) JB と PB の構成と対応は以下の通りである。

表4 JB と PB (∅は対応部分の無いことを示す)

内容	JB	PB(章)
祭詞集	∅	1
詠い方 (viṣṭuti)	∅	2-3
Agnihotra	1.1-65	∅
Jyotiṣṭoma	1.66-364	6-9
Gavāmayana	2.371-442 → 2.1-80	4-5
Ekāha	2.81-234	16-19
Ahīna	2.235-333	20-22
Sattra	2.334-370	23-25
Dvādaśāha	3.1-386	10-15

JB の Gavāmayana の構成について、Murakawa [9] 参照。

- 5) JB と PB の関係について、Caland は PB が比較的新しい活用形語尾を持っていることから、JB より新しい成立であると主張している。さらに「アニミズムの観点に基づいた原始的な祭式」が JB に規定されるも PB に無いことは、PB の新しさを証明するという。Caland [4], p. xviii-xxi. Bodewitz は JB 第1章を核と補遺の部分に分け、PB の補遺である Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa (ṢB) を考慮する。ṢB に JB との並行部分 (PB には欠如) があることから、PB-JB の核・補遺-ṢB という成立順を仮定する。Bodewitz [3], p. 19ff.
- 6) その節の中の行数を示す。
- 7) stoma とは、各 stotra (詠唱) で詠われる詩節の数のことである。サーマヴェーダ祭官にとって、stoma 自体も各々の数も重要な意義を持ち、随所で議論の材料となる。

- 8) Cf. KB 15.6.23: virāḍ vā agniṣṭomah.
- 9) sam/sthā: 「(祭式が) 完結する、終了する」。Agniṣṭoma が Agni-ṣṭoma-stotra で終わることを意味する。この文の主語は従来解釈が分かっている。Keith [8], p. 557: “The Virāj of speech”, Caland [4], p. 102, n. 1 on § 6: “i. e. the stotra destined for Agni”, Bodewitz [3], p. 212, n. 3: “i. e. the Agniṣṭoma”.
- 10) Virāj は本来あらゆる方向に輝き渡る (支配する) こと (例えば生命力や繁殖力) を意味する女性原理である。二次的に、食糧や韻律名、10の象徴 (音節、賭博の出目総数など) として用いられる。ここでは stoma の総計が10で割り切れることを意味する。これらのことについては、Sakamoto-Goto [14], p. 161-163; 167 及び Renou [12], p. 148f. を参照。Agniṣṭoma で詠われる12の stotra (詠唱) の詩節数 (stoma) の総計は $9+15+15+15+15+15+15+17+17+17+17+17+21=190$ である。これは JB 1.235 においても説かれている。Cf. Caland [4], p. 102, n. 1 on §6, Bodewitz [3], p. 132.
- 11) Ed.: prajananam jyotiḥ/agnir devatānām jyotiḥ/virāḍ vācy agnau samtiṣṭhate/virājam sampadyate/ この箇所に関して、Bodewitz は prajananam jyotir agnir devatānām, jyotir virāḍ chandasām, jyoir virāḍ vācaḥ. agnau samtiṣṭhate. (Bodewitz [3], p. 24; p. 212, n. 1-2) “Agni is the generative light (*jyoti*) among the gods, ...” として、句読法を変えて下線部を追加し、vācy を vācaḥ に訂正している。一方 Ehlers は prajananam jyotir. agnir devatānām jyotir. virāḍ chandasām jyotir. virāḍ vācy agnau samtiṣṭhate. virājam sampadyate. (Ehlers [6], p. 95f.) として、下線部を誤脱とするが、句読法は Ed. と同じであり vācy を訂正しない。Bodewitz の “vācaḥ” という読みは TS の並行句を根拠としているが、写本からは支持されないから、vācy のまま読むべきである。
- 12) 12の stotra (詠唱) と śastra (讃誦) から構成される形式を Agniṣṭoma と呼ぶ。12番目の stotra は agniṣṭoma-stotra, 12番目の śastra は āgimāruta-śastra である。
- 13) asthūri は、(引き馬が) 1頭立てではない完全な乗り物のこと。
- 14) 朝のソーマ搾りには trivṛt と pañcadaśa の2つの stoma が使われ、正午に pañcadaśa と saptadaśa, 3回目に saptadaśa と ekaviṃśa が使われる。
- 15) Cf. TS 2.5.10.2: ... ekaviṃśā stōmānām pratiṣṭhā ... [ekaviṃśa

[stoma] は stoma たちの中の脚部 (基部) である」。また、本稿4.2の表2が示すようにプラジャーパティの脚部から ekaviṃśa [stoma] が創出される。その他の対応については何とも言い難いが、JBの列挙する視覚機能、呼気、聴覚機能 (いずれも頭部に関わる)、両腕、腰、脚部は本稿4で触れる RV 10.90 で分割されたプルシャの各部位が想定されている可能性がある。即ち、プルシャの視覚機能、呼気、聴覚機能、両腕、両腿、両足である。

- 16) dviretas と呼ばれるのは牝馬 (vaḍavā: TS 7.1.1.2; JB 1.67:10; PB 6.1.4) と牡ロバ (gardabha: TS 7.1.1.2; 5.1.5.5; JB 1.67; AB 4.9.4. rāsabha: ŚBM 6.3.1.23) である。牝馬からは牡馬と交われば馬が、牡ロバと交わればラバが生まれる (cf. ŚBM 12.7.2.21)。牡ロバからはロバ或いはラバが生まれる。すなわち、二つの種を生むような個体は dviretas である。
- 17) TS 7.1.1.3: tāsmād barhīsy ānavak]ptaḥ. 「それゆえ、[牡ラバは] 祭場の敷き草の上ではふさわしくない。」 JB 1.67: 11: tasmāt aśvataro barhīsi na deyaḥ. 「それゆえ、牡ラバは祭場の敷き草の上では与えられないべきではない。」 PB 6.1.5: tasmād adakṣiṇīyā. 「それゆえ、[牝ラバは] 報酬にふさわしくない。」
- 18) Sarvavedasa 或いは Sahasra である祭式とは、例えば Viśvasit-Atirātra: PB 9.3.1; JB 1.348; ŚBM 4.6.1.15; 10.2.5.16; 14.2.2.47. または、Puruṣamedha: ŚBM 13.6.2.19 などがある。さらに、Sahasra が千頭の牛を意味することについては、TS 7.1.6.1-4; JB 2.249-250; PB 21.1.1-8 を参照。
- 19) 第16番目の詠唱。ここまで詠う形式を Ṣoḍaśin と呼ぶ。
- 20) TS 1.8.13.1; 2.3.7.2; 4.3.2.1-2; 4.4.2.1; 4.4.12.1-3; 7.5.14.1. MS 2.3.7; 2.6.10; 2.7.19; 2.7.20; 2.8.9; 3.16.4. KS 12.5; 15.7; 16.19; 17.8; 22.14; 33.4; 39.7; 36.15; 38.11; 45.10. AB 4.13.6; 4.28.1-4; 8.12.3.
- 21) AB 5.16.22-25; 8.12.4; 8.17.2. JB 2.2; 34; 57; 184; 213; 215; 406. PB 7.8.10-11; 16.5.16-17.
- 22) TS では 4.1.10.5 に一例あるのみで、鳥の体が vāmadevya, 両翼が bṛhat と rathantara, 尾が yajñāyajñīya という等置文である。同様の等置文は、MS 2.7.8; KS 16.8; JB 2.415; 433, PB 5.2.1; 16.11.11 にも見られる。また、AVŚ 8.10.13 も参照。
- 23) Bodewitz もこの点に関して、No. 3 (1.66: 2-4) は No. 4 (1.67: 1-2) に繋がるべきだと主張する (Bodeswitz [3], p. 212, n. 6)。

- 24) Ed.: dadhata iti を Bodewitz [3], p. 24; p. 213, n. 13 及び Ehlers [6], p. 97 に従って訂正。
- 25) Ed.: stoma.
- 26) Ed.: ākhyāyate. 異読は evākhyāyate. Ehlers[6], p. 97, n. 9 に従って、異読を採る。
- 27) この文に関しては No. 2 (本稿 3.1) の PB 6.3.6 を参照。
- 28) Cf. Fujii [7], p. 13f.

Abbreviations

- AB=Aitareya-Brāhmaṇa, ed.: Aufrecht [2].
- AVŚ=Atharvaveda Śaunaka, ed.: Roth/Whitney [13].
- JB=Jaiminiya-Brāhmaṇa, ed.: Raghu Vira [11].
- KS=Kāthaka-Saṃhitā, ed.: Schroeder [17].
- KB=Kauṣītaki-Brāhmaṇa, ed.: Sarma [15].
- MS=Maitrāyaṇī-Saṃhitā, ed.: Schroeder [16].
- PB=Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa, ed.: Cinnaśwāmī [5].
- ṚV=Ṛgveda, ed.: Aufrecht [1].
- ŚBM=Śatapatha-Brāhmaṇa Mādhyandina, ed.: Weber [19].
- TS=Taittirīya-saṃhitā, ed.: Weber 1871 [18].

参 考 文 献

- [1] Aufrecht, T.: *Die Hymnen des Rigveda*, 2Bde. Bonn, 1877.
- [2] Aufrecht, T.: *Das Aitareya Brāhmaṇa*. Bonn, 1879.
- [3] Bodewitz, H. W.: *The Jyotiṣṭoma Ritual. Jaiminiya Brāhmaṇa I 66-364*. Leiden, 1990.
- [4] Caland, W.: *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa: The Brāhmaṇa of Twenty Five Chapters*. Calcutta, 1931.
- [5] Cinnaśwāmī Śāstri.: *Tāṇḍyamahābrāhmaṇa: Belonging to The Sāma Veda With the Commentary of Sāyaṇācārya*, 2 Vols. [Kashi Sanskrit Series 105], Benares, 1935, 1936.
- [6] Ehlers, G.: Jaiminiya-Brāhmaṇa. Electronic Text (PDF. files).
- [7] Fujii, M.: "The *Bahiṣpavamāna* Ritual of the Jaiminiyas", *Machikaneyama Ronso* (Philosophy) 20 (1986), pp. 3-25.
- [8] Keith, A. A.: *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittirīya Saṃhitā*, 2 Vols. [Harvard Oriental Series 18, 19], Cambridge, 1914.

- [9] Murakawa, A.: "The Gavāmayana Portion(s) of the Jaiminiya-Brāhmaṇa: A Preliminary Study". *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 12 (2000), pp. 110-134.
- [10] Parpola, A.: *The Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyana and their commentaries*, Vol. I: 1 & 2. Helsinki, 1968-1969.
- [11] Raghu Vira and Lokesh Chandra.: *Jaiminīya-Brāhmaṇa of the Sāmaveda*. Delhi, 1986 (rept.).
- [12] Renou, L.: "Études Védiques". *Journal Asiatique* 240 (1952), p. 133-154.
- [13] Roth, R./Whitney, W. D.: *Atharva Veda Sanhita: Erster Band. Text*. Berlin, 1856.
- [14] Sakamoto-Goto, J.: "Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka", in *Akten des 27. Deutschen Orientalistentages*, pp. 157-167, 2001.
- [15] Sarma, E.R. Sreekrishna.: *Kauṣītaki-Brāhmaṇa*. 1. Text. Wiesbaden, 1968.
- [16] Schroeder, L. von.: *Māitrāyaṇī Saṃhitā*. 4 Bde. Leipzig, 1881, 1883, 1885, 1886.
- [17] Schroeder, L. von.: *Kāthakam. Die Saṃhitā der Kātha-Çākhā*. 3 Bde. Leipzig, 1900, 1909, 1910.
- [18] Weber, A.: *Die Taittirīya-Saṃhitā*, 2 Teils. [Indische Studien XI, XII], Leipzig, 1871, 1872.
- [19] Weber, A.: *The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Śākhā with Extracts from the Commentaries of Sāyana, Harisvāmin and Dvivedaganga*. [Chawkhamba Sanskrit Series 96], Vanarasi, 1964.

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

Taittirīya-Saṃhitā VII and the Sāmavedic Brāhmaṇas

Chisei OSHIMA

There are parallel expositions of the Jyotiṣṭoma, which is the basic form of the Soma sacrifices, in two Sāmavedic Brāhmaṇas, i. e., the Jaiminiya-Brāhmaṇa (JB) of the Jaiminīyas and the Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa (PB) of the Kauthumas and Rāṇāyanīyas. The Taittirīya-Saṃhitā (TS) of the Black Yajurveda has similar passages on the Jyotiṣṭoma in its seventh book, while the other Saṃhitās of the Black Yajurveda do not have them. The TS continues to give explanations of the longer forms of Soma sacrifices called Ahina and Sattra, which have also parallels in other places of the JB and the PB. This article intends to compare the parallel passages on the Jyotiṣṭoma in the TS, the JB and the PB, and to make clear their correspondences and differences.

As far as the passages on the Jyotiṣṭoma are concerned, the TS VII is closer to the JB than to the PB in terms of the contents and structures of the passages. The TS, however, in some passages, does not refer to the lauds (*stotra*) sung by the chanter priests, which are discussed in both the JB and the PB. This is a remarkable difference between the TS and the two Sāmavedic Brāhmaṇas. The present article does not offer a conclusion as to the chronological relationships among the three parallel texts. For drawing a firm conclusion, we need further examinations of the whole texts including the passages on the Ahina and Sattra.

Keywords: Taittirīya-Saṃhitā Jaiminiya-Brāhmaṇa Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa Jyotiṣṭoma ソーマ祭